

水源禅師法話集 65

(2016年9月24日 大阪合宿8日目)

2017年4月11日

一乗禅の会



目次

水源禪師法話.....	1
メッターヌサティ(慈悲の瞑想)とマラナーヌサティ(死随念).....	1
生まれ変わる理由はしがみつくと握りしめる事.....	3
14番目のジャータカ物語(お釈迦様が猿の王様だった時のお話).....	4
「いやー、実はこれは今始まった話ではない」.....	6
魚と大鷲と蟹のお話し(ジャータカ物語).....	7
前世が木に住む神木だったミャンマーの比丘.....	8
お釈迦様の無量の体験から来ている「正見」.....	9
お釈迦様、観音様が遠くからジーっと見て応援している.....	9
30年ただただ砂をかむような毎日の座禅、ある日突然ポーンと突き破った水源禪師.....	11
正法に出会えば、絶対に幽霊は入って来ない.....	11

水源禪師法話

メッターヌサティ(慈悲の瞑想)とマラナーヌサティ (死随念)

【水源師】

ええと、メッターヌサティ(METTĀNUSSATI)を、パーリ語を読経してみます。2回で良いですか？2回？3回？あの何故3回するか分かりますか？3回。いつも最初は過去劫千仏、次は顕劫千仏、そして未来劫千仏。今は顕劫千仏の第四番目のゴータマブッタ。だから私達はこの非常に長い仏界の二番目の大仏世界におります。第一番に過去千仏の事で第一回目。第二回目は私達。第三回目は未来の千の仏の事を祈ってする非常に広大な意味があるわけです。ただそれが昨日今日明日じゃないわけです。

【参加者】

それで全部三回ずつなのですか？

【水源師】

そのとおりで、三回です。これで全部入ります。だから三重の塔は過去千仏、顕劫千仏、未来千仏があります。三千仏があります。それで三千大千世界。広大な話ですけども、たださっと言っておきます。陽炎のごとく、味も何も分からない。ただこれでおしまいではないのです。だからそのパーリ語は簡単な様で深い意味あいがあるわけです。それを東洋の哲学の儒教からしたら非常に幼稚に見えるけれど、幼稚ではないのです。実に深い教えがあるわけです。

良いですか？それでは、じゃあ、あの、下手な声で読経してみます。

METTĀNUSSATI

(慈悲の瞑想 Meditation On Loving-Kindness)

(パーリ語読経)

Attupamāya sabbesam — Sattānam sukha Kāmatam
Passitvā kamato mettā — Sabba sattesu bhāvaye.
Sukhī bhaveyyam niddukkho — Aham niccam aham viya
Hitā ca me sukhī hontu — Majjhata tha ca verino.
Imamhi gāmakkhettamhi — Sattā hontu sukhī sadā
Tato param ca rajjesu — Cakkavālesu jantuno.
Samantā cakkā vālesu — Sattānam tesu pānino
Sukhino puggalā bhutā — Atta bhāva gatā siyum.
Tathā itthi pumā ceva — Ariyā anariyā pi ca

Devā narā apāyatthā — Tathā dasa disāsu cā ti.

と、こうお釈迦様は言われました。次、マラナーヌサティ(MARANĀNUSSATI:死随念)。

MARANĀNUSSATI

(パーリ語読経)

Pavāta dīpa tullyāya — Sāyu santati yākkhayam

死を心から良く見つめる時、灯る蠟燭の火と貴方の命を見比べて下さい。

Parūpamāya sampassam — Bhāvaye maranassatim.

その炎をそよ風の中に置き、今でも消えそうになる炎を見ながら、貴方の死を見つめて下さい。

Mahā sampattisampattā — Yathā sattā matā idha,

この世で誰ぞ、栄華を永遠に楽しむ事が出来るでしょう。何れ死が訪れます。

Tathā aham marissāmi — Maranam mama hessati.

その死が訪れる時に、その死が本当に貴方を包み込みます。

Uppattiyā sahevedam — Maranam āgatam sadā.

生まれ落ちた時から、死は始まります。

Māranatthāya okāsam — Vadhako viya esati.

その様に、何時でも死刑執行人が貴方を待っております。その貴方を何時でも死刑を執行出来る機会を伺っております。

Īsakam anivattam tam — Satatam gamanussukam

命は留まる事なく次から次へと続いて輪廻転生を繰り返します。

Jvītam udayā attham — Suriyo viya dhāvati.

太陽が上がり、また下がる。その様に、いつも永遠に輪廻は繰り返します。

Vijju bubbula ussāva — Jalarāji Parikkhayam.

死は一瞬の稲妻の様に、また水の泡の如く。また露が葉の上から滴り落ちる様に、一瞬であります。

Ghātakova ripū tassa — Sabbatthāpi avāriyo.

それは、敵が貴方を殺しに来る様に、死は絶対に避けられません。

Suyasatthāma puññiddhi — Buddhi vuddhe jinaddyayam Buddhas,

もし貴方がその一瞬の死を訪れる時に、仏光と出会うという事は、この世で最高の栄光であります。

Ghātesī maranam khippam — Kātu mādisake kathā?

それは、この世のどの様な力よりも、権力よりも、恵みよりも、どの様な力の奇跡よりも、どの様な英知よりも優れたものであります。これ以上の事は無いでしょう。

Paccayānam ca vekallyā — Bāhirajjhattu paddavā

いつも食事を求める様に、体の内部より病気になり、または事故に遭い。

Marāmoram nimesāp — Maramāno anukkhanan ti.

その様に、いつも貴方を死は狙っている。そして一瞬の瞬きの間に貴方は死んで行くでしょう。

と、言う様に、深く読経して、そしてまず十人の死んだ方を思い浮かべます。一回一回綺麗に思い浮かべます。そして十人目が終わった時に、あなた自身をじっと見つめます。そうすれば、あなたがいつ何処かで死んで行くか明快に分かります。で、その後で、あなたが強烈なニミッタを持てれば、そこから先にまた進みます。それが無い場合は、ま、それでおしまい、ただあなたの死を見つめて下さい。いつ死ぬかあなたが見る事が出来ます。また、それを回避する手法もありますけれども、それはその時です。非常に重要な瞑想で、これは来世にも影響して来ます。

— 瞑想 —

生まれ変わる理由はしがみつく事、握りしめる事

【水源師】

いつの世でも、如何なる世界でも、正しい物の見方。ただこれだけしか涅槃に達する方法は無い。ただこれだけによって、再び生まれ変わる事は無い。でも、人間界だけの話ではないわけです。欲界全て。四悪道と人間界、それから天界。それから色界、ブラフマの世界。それから無色界。全てこの正しい見方によってだけ、再び生まれ変わる事は無い。

どの世界でも生まれ変わる理由は、さっき言ったその clinging(しがみつく事)。holding(握りしめる事)ですね。昨日お話した様に、へびさんが前は大金持ちだった。で、川の傍に、四十の金塊を埋めた。で、その因縁によって、やっぱりへびに生まれたわけですね。結局、それがとっても気になるから。で、お金を、って言うのを、あの商人ですから。朝から晩までお金の事を考えて。喉が渴いた様に、それなくしては、もう生きて行けないわけです。また、その、ネズミさんも三十の金塊。前は大金持ちで、やっぱり川の傍に埋めておいて、そして死ぬ時に、その金塊の事が心配だから、人間の姿から今度はネズミさんに生まれたと言う。

そのデバダッタの前の世でもお釈迦様を殺すと言う事で、これ今始まった事では無いわけです。デバダッタがお釈迦様を殺そうと。ずうっとずうっと遠い昔、そのお釈迦様が鹿だった時にやっぱりデバダッタが狩人として、どうしてもこの鹿を仕留めたくて殺そうとしたわけ。殺す事は出来なかったけれどね。その強烈な喉が渴いた様な。どうしてもやめる事が出来ないと。それをどうしてもこの獲物を追おうと言う強烈、もう強烈な心が結局いつまでも holding ですね。だからアーチャンチャーがその心を捉えるように、蜘蛛が蜘蛛の巣にかかった獲物をとらえるように。だから釈尊が何回生まれ変わってもデバダッタが何処かに居て命を狙う因縁が次から次と起こったわけです。で、お釈迦様は菩薩行としていつでも、その正しい物の

見方を過去五百生やったわけです。

14番目のジャータカ物語(お釈迦様が猿の王様だった時のお話)

そしてジャータカの十四番目のお話ですけれど、お釈迦様が弟子達を連れてね、旅して行く時に、この町からあの町という時に、旅の汚れを取るために、池があるわけです。で、皆水浴びしたり、そしてその若い子供のサマネーラ(沙弥)とかね。そういう人達はちゃんとした仕事があって、川に入った竹とか、それから茎の長い植物があればそれを取って、ちょっと短くして、中に針を入れるための道具作るとかの仕事。

お坊さんは必ず針を衣に刺しておきます。また手拭は必ず持っています。なぜかと言ったら、私もよく旅で一番困るのは、衣が切れたりシャツが切れるわけです。そしたらどうしても裁縫が必要になるわけです。で、やっぱり衣を崩すわけにいかないから、やっぱり手拭とかそういうボロ布があったらそこから糸を一本取って、そして、針を通して直すわけです。で、その当時は袋みたいなものを下げて歩くから。ちっちゃい竹筒みたいに、それを切っているんな柔らかない茎の長い植物でも必ず節がありますから、それを色々と利用したようです。

で、その若い小間使いのお坊さん達が川に水浴びして、ついでに大弟子の比丘達が顔洗ったりゆっくりしている時は、針を入れる筒を作るわけです。ところがどの茎をとっても、全部芯がね無くて、真っ直ぐ上から下まで通っているわけです。それで「こういう事があるものか?」と、竹でも何でも全てが、筒が通ってしまっているわけです。節中の節が全然無い。それで「お釈迦様、これはどうした事でしょう?」と。「うん、実は今から四劫前の話。の前世の話。四劫。その時、私は猿の王様だった」と。で「私の家来達は八万頭も居った」と。で「私は猿の王様で、大きさは小さな子山羊。子山羊くらいの大きさで、体の色は薄い栗色だった」と。

普通猿さんはね、どこに行ってもこれくらいなのですよ。だからちっちゃい子山羊って言ったら、もうこれくらいの大きさになるから、もう巨人ですよね?で、八万頭を率いるそのお猿さんのゴータマ菩薩様がね「全て私の言う事を必ず聞きなさい」と。「森に入って全く見た事のない果物があったら、まずは私に知らせなさい」と。「絶対食べてはいけません。また、全く知らない所に行って、そこで水を飲む時は、まず私に知らせなさい」と。絶対にその水は、飲んではいけません」と。

そして、このお猿さん達が、群れを成してゆっくりとこの森からあの森と。で、知らない森に来たら、池があって、で皆池の周りでじーっと座っているわけです。で、この池にはね、池の化け物が居って、一切の生き物がその水を飲む瞬間に、全てパクリと食ってしまう。一匹も逃さずに。それで、水の中からじーっと見ているわけです。「何故、一頭の猿も水を飲みに来ないのか?」と。で、そこにゴータマブッタの猿のキングが来て、「君達は一体ここで何をしているのか?」「はい、言いつけ通り王様来るまで、じーっとここで水を飲まずに待って、王様からの許しを得るまでじーっと待っていたのです」「おお、なかなか宜しい。良い見方だ」と。「ちょっと待ちなさい」と。で、池の周りをずうっと歩いてみたら、全ての足跡が池に入るけれど、一つも出て来ないわけです。それで「おお、君達はなかなか私の言う事聞いて良かった」と。

「ここには化け物がいて、お前たちが入ったら食べられるところだった」と。

そしたらいつまで経ってもお猿さんが池に来ないので、その化け物が出て来てたのですね。ゴータマ菩薩が「お前はこの池の人食い鬼か?」と。「はい人食い鬼です。そうです」と。「お前は池に入った生き物は全て食べるのか?」「そうです。一匹も逃がしません。全て食べます」と。また正直に答えるのです。嘘は付かない。

「じゃあこの私の家来の猿が池から水を飲んだら食べるのか?」「絶対に食べて一匹も逃がしません」そう言うわけです、本当に(笑)。正直に言う。嘘は付かない。で、水から上がって来たこの化け物は、腹は紫色の腹なわけです。顔は真っ白。両手両足は真っ赤っか。「よし、じゃあ水に入らないで飲むのだったらどうか?」と。「それだったら私は食べる事が出来ないと」。

それで、大猿王のゴータマ菩薩様がそこにあるそのちっちゃい竹あるでしょ? パーンと取って、荘厳に祈るわけです。それで、フツと吹いたら、竹の中の節が全部無くなって、ストローになったわけです。それで一回一回吹いて八万頭分も作るのは大変だと。それで、深くお祈り捧げて、荘厳なお祈り捧げて「ここに生える全ての節のある植物は、茎の中がストローになる様に」というお祈りをしたわけです。そしたら何と、どの植物も中は節が無いわけです。それで、みんなお猿さんがそこから池に入らずに、その長い竹筒で水を飲んだり、他の植物の筒で飲んだりで、一匹も死ななかつたわけ。つまりお釈迦様は、ゆっくりと点検したわけです。だから一匹の家来も失う事がなかった。このことを Right view (正見)と言います。



「いやー、実はこれは今始まった話ではない」

で、前にお話した様に、間違っただけの見方をしたらこのようなことが起こります。お釈迦様がある村に行ったら、皆傷付いて倒れていると。皆槍、刀、弓で蚊を退治しに行くと。これ本当の話。お釈迦様は、夢物語みたいな事言っているけれども、本当に全て起こった話なのです。私達の頭はね、私達がお話しする事だけが真実であって、それ以外の生き物は全部言葉も会話も出来ないって教えられたでしょう？でも、霊能者はね。幽霊とも話しますし。また動物もお話しします。聖者達もまた動物とお話しします。私達はね、能力が無いので理解ができません。その村人たちは弓矢で、蚊を退治する頭しか無いから。そういう皆が傷付く事が見えないわけです。精々やる事は、ピカピカ光る鉞、お父さんの頭に止まった蚊退治して真っ二つに割るという風な、私達は実はそういう存在なわけです。で、この化け物でも嘘を付かない。人間はもう朝から晩まで嘘付く人間もいっぱいいます。

でそれで、そのお釈迦様の時代にね。そのお釈迦様が、祇園精舎に住んでいる時に、その時に一人の比丘がとても裁縫が上手なわけ。ボロ布を集めたり切って、もう素晴らしいこういう衣を作るわけですね。こう繋ぎ合わせて。それで、この裁縫師の比丘が作るのは、もう恰好も良いし、何とも言えない作り方で有名なわけです。そして彼はそのボロ布を集めて、こう裁縫が上手だから見た目に非常に綺麗に見えるわけです。で、ボロ布だから触ってもとっても柔らかくて、それを、その色の付いたその色をメリケン粉に混ぜて、それを綺麗な色に塗りたくって、それを貝あるでしょ？貝。貝で一生懸命もみ込むわけです。貝の殻で。そしたらピカピカピカピカして綺麗でしょ？

だから、それを見て、他の比丘達はそういう物を作れないから、「いやあ、とっても素晴らしい。私にもそれ作ってくれ」と。「いやあ、でもこういう物を作るのは、とっても時間が掛かるから、あの、もしあなたの着ている衣と引き換えてくれたら差し上げます」と。そしたら、もう比丘は大喜びで「おお、よしよしよし」と。すぐ引き換える。「こんな綺麗な物とこの衣とは比べ物にならない」と。それで、すぐ替えてもらったのです。

ところが、このピカピカする素晴らしい衣が、そのうち汚れて来るでしょう？で、熱いお湯で洗ってみたら、実はボロ布だったわけ。ところが、その引き換えた衣は非常に高価な、実はずうっと高いものだったわけです。と、いう風に詐欺にあったわけ、騙されたわけです。

で、この人はそういう事ばかりしているから有名なわけなのです。裁縫師の比丘という事で。誰でも引っかけってしまうから。そして、その近くに住む村の他の寺院の比丘もまた非常に裁縫が好きで、それで、この比丘もまた同じ事をしているわけで。綺麗に作ってね。それで、ある比丘が来て「おお、あなたはあの祇園精舎の比丘と同じ事している」と。「おお、そういう人があるのか？」と。そういう、あのサーバティーに。「よしよし」と、で、彼はまた丹精込めてボロ布で実に綺麗な鮮やかな、そのスリランカのオレンジ色の綺麗に染め上げて、それを着て歩いていたら、祇園精舎の詐欺比丘が、「いやあ素晴らしい、これは是非手に入りたい！」と。「あのそれ私に譲って下さい」と。「いや、私は田舎の坊主で、こういうもの

は滅多に手に入らないから、あなたにあげたら着る物が無い」と。「あなたは町の比丘だから、いつでも手に入るでしょう?」と。「田舎じゃ滅多に手に入らないのです」と。

また、今はこれ、その簡単に数千円で買えますけれども、昔はこれ、その金貨みたいに非常に高価な物。何故かと言ったら、いちいち糸を継いでいちいち糸を組み上げて行くから、凄い時間が掛かるわけです。だから一反って言うでしょう? 田んぼ一反。あれは布の一反、その生地一反と一緒に価値なわけなのです。相当なお金。だから一反と言う。それでそれくらいのお金だから、だから衣を三つ四つ持てばもう大金持ちなわけで。特にその素晴らしい材料で作った物はね。

今でもミャンマーに行けば蓮の糸で作った衣あるのです。蓮。こういう風に染め上げて。いや、いや。こんな衣着けたら罰当たると、例え買えても。私は遠慮しましたけれど。その蓮の糸で作った衣はね、そこの実に五百阿羅漢という、そのミャンマーでも超有名なお寺にずっと飾ってあるのです。まあ、それは誰でも欲しいでしょうね? そのミャンマーではね。でも私みたいな坊主が着たら、もうこりゃあ失礼。大失礼だから、まあ関係無いと。例え買えてもね、それはちょっと私には遠慮願って。

それで、その田舎の詐欺比丘がそれを着てずうっと歩いて、それで綺麗なオレンジ色の衣と、この祇園精舎の比丘と引き換えたわけ。祇園精舎の比丘は結局凄い高価な本物を持って着て歩いたけれども、それ以上に良く見えたわけですね。で、この祇園精舎の、その詐欺比丘が、これ本当の話。また、洗ってみたわけです。そしたら何と色が全部落ちてボロ布だったわけ。それを他の比丘達が皆見て大噂したわけ。「とうとう彼が逆にやられた」と。でお釈迦様がその比丘達が騒ぎして話しているから、その道場で。「ああそうなのか」と。「いやあ、実はこれは今始まった話ではないのだ」と。

魚と大鷲と蟹のお話し(ジャータカ物語)

その遠い昔にね。その森の中に池があるわけです。深い森の中でその池には人も訪れない、で池もそんなに大きくないから、夏のカンカン照りになれば水が下がって来るわけです。そうしたら魚がウヨウヨ泳いでいるのも見えるわけです。で、大鷲がね。大鷲が、じっとこの鳥が「いやあ、食べたい。どうしてこれ食べたら良いのか」と。アフリカにいる凄い鳥はね。こう頭がこれだけデカくてね。まあ鷲の一種でしょうけれどね。三日間くらいじーっと動かずにじーっと突っ立っていて、で、魚がね、騙されて近くに来ると。その鳥がスッ、パクッと食べます。三日じっと立って。こりゃ凄いヨギの行者。アハハハハ(笑)。本当、本当に。その精神力たるものは凄いと思うよ。微動だにしないから、その魚がね、騙されて。頭でっかちの鷲にパクッとやられる。

まあ、その大鷲が「食べたい」と。それで、この魚達を食べるのは、ちょっと無理だから。近くに行ったら逃げるし。それで、水辺に来て「おい、君達。これからドンドンドン干上がったら、この池が枯れて皆死ぬよ」と。「君達をここからちょっと離れた大きい池。そこには、五色の花、五色のね、蓮の花があつて、それは天国みたいなところだ。そういう所に連れて行

ってあげるから」と。で、魚達がね。その大鷲にこう言ったわけです。「この世始まって以来、鷲が魚を食べないという事は無い」と。「嘘だろ。信じない」と。「いや、私は嘘付かない」と。「絶対に騙さない」とそう言った。

で、あまりにも上手にお話するから、その片目がちょっと潰れた大きい魚が、「よし、じゃあ行ってみよう」と。で、嘴で掴んで、ずうっと行って見せて、泳がせて、また掴んで帰って来た。「これみろ」と。「お前、お話しなさい。どんな池だ?」「いやあ、五色の蓮の花が咲いて綺麗で素晴らしかった」と。「いやあ、でも信じない。また騙して食べるのでしょうか?」「いやいやそんな事ないよ。私は君達を助ける為に今ここにいるのだ」と。

で、また他の魚も掴んで、そこに持って行って泳がせて、それを四、五回やったわけ。そしたら「いやあ、じゃあ我も彼も行きたい」と。そしたら、最初に行ったのが、一番先に行ったから、片目が潰れたこの大きな魚が一番乗りで行ったわけです。そしたら、この大鷲がね。池に生えてるその棘の長い木があるわけです。で、この片目だからね。「その池が来た」と。で大鷲がパクッと離れたらね。池に入るつもりが、鷲がちゃんと木に落ちる位置で片目の大きい魚を落としました。だから刺さったわけ。そしたら、鷲がねその魚を上手に剥いて皮剥いて、ペロッと全部食べて骨だけにして。で、その池のさかなを全部食べちゃったわけです。

それでも「まだその池に何かあるのではないか?」と。実は蟹がいるわけです。蟹さんが。で、蟹さんにも同じ事言ったわけ。「これ見ろ、みんなこの池の魚いないでしょう?他の綺麗な池の所に行ってる」と。「いやあ、でも私はお前を信じる事が出来ない」と。「特に嘴で掴んでポロッと空中で落としたり、私死ぬじゃないか」と。と言う事でこの大鷲も「まあ仕方ないな」とカニさんに首をつかませて、後で食べてやると思いつつ、で蟹さんはね「もしこの鷲が私を騙したら、このハサミで首をちょん切って殺してやる」と。何方もそういう計画があるわけです。

それで大鷲が「じゃあ良いだろう」と。で、首に蟹さんがっちり首に掴まって。で、その大きい蟹のハサミをがっちり、いつでもちょん切れる状態で。そしてすーうっと飛んで行って。その棘のある木の所に来て「あれ見ろ、私全部魚食べちゃった。今度お前の番だ」と。「私はそう思った。お前が私を落とす前に、お前の頭をちょん切る」と。「どうせ死ぬのだったら一緒に死ぬ」と。そしたら、この大鷲さんがね、「いやあ、いや命は欲しいから、じゃあ水辺に降ろしてやる」と。「でも、信用出来ないから今ここでちょん切る」。「いや、待て。待ってくれ。絶対に降ろしてやる」。「お前また嘘つくのだろ」。「いや、嘘つかない」と。で、上手に降りて「この陸ではなく水の中だよ」と。陸に降ろしたらパカッと殺されるから。それでトコトコと水の泥の中に入った瞬間に、この蟹さんパチッと首を切った。

前世が木に住む神木だったミャンマーの比丘

と言うお話し、お釈迦様はその時、木に住む神木だったわけです。ミャンマーでその私の様に行を成した、あの時三十代かな?四十代の有名な人で前世が木に住む神木だったようです。だから人間にもう一回生まれた時に、何故神木になったかと言ったら、結局その主

人が非常に信仰が強くて善良でね。ただ、その家にね、愛着があるわけ、その場所に。だから離れられないから、その木の神木になった。こういう話したでしょう？これ本当の話ですよ。

だから、この比丘さん、会ったでしょう？台湾で。その何て言ったかな？台湾でパオのお寺開いたではないですか？開いたのは、ではなくもう一人の偉いお坊さんのお使いしているあの若いお坊さん。あの方よ。だからあの方が私の事をミャンマーで噂してるって言って。で、前回も本当はそのパオのそのメイヨウの道場が出来たから、ここで全部ティーチャーズクラスをやるから来ないかと。「いや、私はちょっと行けません」と言う事で。彼も修行が非常に素晴らしかったようで、通過したわけです。だから非常に有名な方です。なぜ有名かと言ったら、彼が小さい時に隣の村に生まれて、「ああ、あの人は私の奥さん」。この方のおはなし聞いたでしょう、体にその木のマークがあるわけです。あの方ですよ。

で、だからその時、お釈迦様は、その木の神木で、それをジッと見ていたわけ。でその祇園精舎の詐欺比丘が実はこの大鷲であって、でその遠くに住む村の詐欺比丘が実はこの蟹さんだったと。ただ蟹さんの方が、正しく物を見ていたわけですね。で、他の魚さん達は皆騙されたわけです。

お釈迦様の無量の体験から来ている「正見」

と言う事で、「如何に正しく物を見て修行するか」と。「これ以外に無し」と。このお経が言っているお釈迦様の言葉は、こういう体験、無量の体験から来ているわけです。だから、人間の頭で「あれだこれだ」と言うのは、愚の骨頂。だから、もう人間はね。もうすぐ、artificial interlligence(人工知能)プログラムでロボットが出て、そのうちコントロールされるでしょうね。造る人間は、もうちゃんと分かっているけれど、私達は何も知らないからね。イチコロです。大鷲がね、池でパクパク食べる様に騙されておしまい。

と、言う事で、如何にそのお釈迦様の法を得るとい事が大切か。と言う話ですね。ずうっと最初から正見、正見、正見と来て。それで今回、その正しい物の見方と、その修行によって、二人の凄い法を体得した方が出ました。一人はBさん。もう一人はSさん。おめでとうございます。良かったですね。これが本当の瞑想です。哲学ではありません。また、Nさんは、その病に負けずに、ずうっと長い事精進、精進として、よくここまで頑張りました。正見、精進。

お釈迦様、観音様が遠くからジーっと見て応援している

【参加者】

本当はお薬を飲んでいたのですけれども、先生のアドバイスで西洋のお薬も最初は止めて。漢方も先生にちょっと見て戴いたら。Nさんの体を通して確認して、お薬と合うかどうか確認して、先生もご自分で漢方のお薬を舐めて、やっぱりNさんの体に合わないという事で、

全部止めて。一日とちょっと経っているかな？何とか頑張っています。

【水源師】

と言う事は結局修行も出来ない様になっている。いつも頭がポーンとして気分が悪い。それでも、その中で、ずうっと何年も何年も行を続けて来たでしょう？その苦しい中で、ここです。ここです。

【参加者】

東京自主瞑想会も真面目に来られてね。

【水源師】

だから間違いない方向で来ているわけです。過去の因縁で。ま、そういう風に、これは全て天界の観音様、お釈迦様の有り難い応援でここまで来ています。だから、皆さんに言ったでしょう？「お釈迦様が、遠くからジーっと見て応援しているよ」って。実に、凄い事です。これは。実体験をしないから分からないでしょうけれど、実体験した人はもう分かりますね？どんな事か、口で言えない様な。だからこれからも、皆さんに法を分けて上げて下さい。



30年ただただ砂をかむような毎日の座禅、ある日突然ポーンと突き破った水源禪師

【水源師】

・・・だから十三仏の最後に来ます。で、虚空蔵菩薩様から教わった虚空の空我？の方で自我を見たら、もう一目瞭然で自分の愚かさが見えます。で、そのヴィパッサナーで、その空に達する方法があります。それはただ法随観だけが正式に教えています。あとは空に達するのは禅で達する事が出来ます。どちらも行き着く所は一緒ですけれども、ただ禅の場合は、人空、法空、空空まで行きますので。これ達磨大師様の極意は凄いものです。

あの、南伝の方は、この空というのは秘密なのです。スンニャター(suññatā)。という風に、南伝では空に達するという事は至難の業なのです。で、その北伝の禅の方は、私は三十年間ただ丹田をやっていただけ、丹田。先生の言われる様に。そして、非常に単純な故に、非常にまた辛いです。何も無いから。何にも無い。何にも起こらない。まるで砂を噛む様な毎日ですけれども、滅多に上手く行くという事は無いのだけれども、ある日突然ポーン！と、その突き破ってしまってますね。

だから、それはいつ発生するかしないかは、その全く未知の問題で、ただ私の先生に私は「これ100年やって何にも起こらなくても私はただこれで行きます」という事で「宜しい」と言う事でずうっと来ました。で、ある日突然ポーン！と開けたのですね。非常に単純で何のテクニックも無いが故に、やはりそれだけパンチが強いですね。ヴィパッサナーはやっぱり非常に手法が良くて、研ぎ澄まされた剣ですけれども、やっぱり剣だからね。そのこ筒みたいな。私には壁を突き破るにはちょっと難しいところがあります。またそれはそれで、使い方がありますけれど。

正法に出会えば、絶対に幽霊は入って来ない

ま、そういう事でちょっと今回はもういつにも無く沢山の気づきが出来ました。これがまた不思議で、で、何故今回はこれだけ上手く行かないのかな？と。で、歩いてみたら、ここにお墓があるのですね。普通は、道場はお墓の傍でしません。だから修行道場はお墓が実は無いのです。でも、今はもうここも在るべきでは無い所に、お墓がいっぱいに在るから。それで「あ、なるほど」と。最初来た時、沢山の幽霊が出て来てね。いやあ、こんな話したら、みんなびっくりするから黙ってたけれど。いや、本当に沢山の。それで、何とか誤魔化して磁場が悪いとか、そう言ってます。

【参加者】

アハハハハハ(笑)

【水源師】

今は、何か非常に感謝しているみたいで、スーっと静まりました。皆さんのお力で。結局日本は素晴らしい仏国だけれども、今は修行が出来ない様になっていますね。だから、その教

える先生方もドンドン消えて行くし。で、結局残るのは経典ばかりだから、マニュアルで車を運転出来ないわけですね。実際にインストラクターがいて、非常に上手に危険な所も行けるけれど。その素晴らしいインストラクターもう殆ど消え去ってしまって、どこかに隠れているのでしょうかね。

それでもう、どこを見てももう幽霊だらけなのですよ。で、幽霊に憑り付かれたら、なかなか幽霊出て行かないですよ、とつても居心地が良いから。幽霊は幽霊の体がありますけれども、やっぱり前世は人間だから、その人間の体に入ったら、そりゃなかなか出て行かない。だから、正法に出会えば、幽霊は絶対入って来ないけれど。それで、正法で無い場合には、魔が喜んでそこに入って行くから、益々その正法を伝えない様にします。

で、さっき最後のお話で、正しく見られない様になっているでしょ？大鷲で。ね？で鷲が、また同じ習性でお釈迦様の時代に生まれても、また同じ性格で、騙す事を止められない。だから、特にこの世は、それが習性だからね。昔、そういう風な習性だから、また本人は知らないわけ。正法に出会うまで。止める事が出来ない。ただ、皆さんには、この状況を話してね。正法で修行していけば、そういう物を全部、去る事が出来ます。

今世界中に、もう幽霊がもういっぱい出回って。殆ど薬で押さえ付けてますけれど、実は薬じゃ効かないのです。ただ押さえ付けて。見ていたらやっぱり瞑想は人生で一番したくない科目。一番したい事は、美味しい物食べて、そして楽しい旅行する事。で、クルクルクルクル回って、美味しい物。それで、だからそういう精神過程とか、そういう事をまずしたくない。だから、益々そういう先生方が少なくなっている。だからその悪循環になっています。

と言う事で、皆様が良くここまで、精神界を求めて来て頂いてとてもありがたいことです。で無ければ、もう殆どもうカナダでも、私の年代は全て薬漬けで、もうどこにも行けません。お医者さんが居なければ、生きて行けないから長旅ができません。もうそこでもう自由に歩けない。色んな薬とか、注射打たれて、それが無ければ一週間で禁断状態になると言うか。もう60、55歳あたりから、もう薬漬けですよ。私の場合は、お医者にも行かないし、人間ドックも行かないし、一切無し。だから、政府の方から、「前立癌が流行ってるから、是非チェックしに来なさい」と。でも全然行かないのです。

ま、そういう事で。やっぱり、若い時からずうっと瞑想して、何かの縁でね。やっぱり、過去生だったのですね。過去生で来て。結局、何か今ちょっと観音様のお手伝いさせて貰えるのかなあ？っという感じで、とてもお釈迦様には感謝しています。



水源禪師法話集 65
(2016年9月24日 大阪合宿8日目)

2017年4月11日 発行

編集兼発行 一乗禅の会